

令和7年度第2回北海道立帯広美術館協議会議事録

- 1 日 時 令和8年(2026年)2月27日(金) 14時10分から15時30分
- 2 会 場 北海道立帯広美術館 講堂
- 3 出席委員 加賀学(会長)、石崎庸之、梅田雅則、金田一明一、後藤眞美子(オンライン参加)、佐々木宰、佐藤寛之、柴田勇一、嶋健、富永彰子(オンライン参加) 計10名
- 4 事務局 野上義秀(館長)、西巻信吾(副館長)、瀬戸厚志(学芸課長)、野本寛(主査)、野田佳奈子(主任学芸員)、鎌田大遙(主事)
- 5 傍聴者 なし

6 議 事

展示会観覧、館長挨拶、金田一委員紹介後、議事に入る。

- (1) 委員意見への対応について
- (2) 令和7年度事業の実施状況及び美術館評価について
- (3) 令和8年度事業の運営計画について
- (4) 協議・意見交換

7 議事録

(1) 委員意見への対応について

事務局より、第1回会議における各委員からの意見に対し、具体的に取り組んだ事項と意見に対する美術館の考えを報告。

(2) 令和7年度事業の実施状況及び美術館評価について

事務局より、1月末現在における令和7年度の事業の実施状況と美術館評価の進捗状況を報告。

委 員：オンラインでの鑑賞教育というのは大変よい取組だと思うが、美術館評価における「児童生徒向け鑑賞教室」の実績が目標値に届かない見通しだという説明でした。また、小中学校の先生方と交流を持ち色々なアドバイスをもらい、学校関係者用に帯広美術館活用ガイドを作成したとのことでした。この先生方との交流で、オンラインの鑑賞教室の実績が伸びない理由などはお聞きになられたのでしょうか。また、活用ガイドを配布することで実績が伸びると考えていらっしゃるのでしょうか。

事務局：先生方との交流から、美術館が学校向けに何に取り組んでいるのかを十分に認識してもらえていない状況にあることが分かりました。具体的には、中学校には美術の専科教員がおり、教員自らが美術館に足を運ぶこともあるので美術館の事を知っている方が多いですが、小学校の先生は足を運ぶ機会が少ないので、美術館でどのような取組を行っているのかを知らない方が多いこと、それから、4月に美術館での取組を周知しても、学校では既に教育計画が組まれているため、周知のタイミングが遅いことです。こうしたお話を伺いましたので、まずは、取組をしっかりと学校の皆さんに認識

してもらふこと、それから教育計画が固まる前に取組を周知することが大切と考え、今回は2月に文書を発出しました。この発出のタイミングは遅かったのかと思っています。来年度は12月から1月には、各学校の担当の先生の手元にこの活用ガイドが届くようにしたいと考えております。

(3) 令和8年度事業の運営計画について

事務局より、予定している令和8年度の事業の運営計画を説明。

(4) 協議・意見交換

委員：今年に入り、日本と中国を行ったり来たりしていて感じるが、言葉の壁というものがある。帯広美術館にも韓国などアジア系の方が来館するが、こうした方々への配慮が必要ではないだろうか。色々なサービスがあると思うができる範囲で取り組んでほしい。今年開催予定の「さくらももこ展」はアジア圏からも多くの観覧者が来ると思うので、転ばないようになど安全性も含めて配慮の検討をされてはいかがかと思う。オンラインが上手く機能しておらず、コロナ終息以降、オンラインに携わる機会が減っているように感じているが、エゾリスがたくさんいる公園内に美術館があるという、足を運びたくするような、美術館に来るまでの素敵な道のをコマースに付け加えて上げると、オンラインから発展し、リアルに足を運んでもらえるようになることもあるのではないか。

事務局：会議前にも委員からヒントがもらえないか相談してしたが、昨年の夏以降、韓国からの観覧者が人数は少ないが、コンスタントに来館されている。今はお客様が携帯電話に翻訳アプリを入れて使いこなしている。このため、美術館の受付では、お客様の翻訳アプリに便乗してコミュニケーションが取れている。つい先日になるが、翻訳アプリを使いこなせないお客様が来始めた。そのため、お互いに片言の英語で、身振り手振りで、何とかコミュニケーションをとった。今年の夏は韓国からのお客様が増えてくるのではないと思っており、受付で困らないように、使い勝手のいい翻訳アプリだとか翻訳機が無いものかと探し始めている。オンラインの充実については、今後の動画作成の過程で御意見を参考にさせていただきたいと思う。

委員：今、話しのあった翻訳アプリについて、後程お伝えする。私達の取組として、令和8年度に帯広美術館で「とちのいきもの展」を開催する。美術館のおかれている状況や体制について、自分達もひしひしと感じながら、5月の開催に向けて準備をしている。皆様にも、御指導御鞭撻いただければ幸いです。実施可能かどうか分からないが、美術館の中庭に、例えば、キッチンカーを置くなどして、また、中庭を散策される方や、ポケモンを探して集まってこられる方を対象に、若年層に限らず大人の方も気楽に来館してこれるような賑わいをつくるのも必要かと思う。

事務局：恒常的にキッチンカーを置くことは難しいと考える。今年度開催した「サンリオデザイナー展」では、クレープ号をスポット的に設置した。いただいた御意見も参考にしながら、美術館に足を運んでもらえる方法を考えていきたいと思う。

委員：今年度の観覧者数は、「サンリオデザイナー展」と「中島みゆき展」のウェイトが非常に大きいと感じた。令和8年度の事業計画の中に、この2つの展覧会に対抗できる

だけのウェイトを持つものがあるのかという点と、どの程度の観覧者数をもって美術館の維持を考えているのかという点、それから非常に感じるのは、「サンリオデザイナー展」でもそうだったが、十勝で一番人の出入りが激しい場所に、美術館のPRがなかったのではないかと感じている。私の勤め先もそうだが、残念ながら美術館のPRのポスターが貼られていない。人の出入りが激しい所にPRをかけた方が効果があると思う。

事務局：観覧者数の目処という点に関しては、資料にある運営計画に書いてあるものが最低減達成しなければならない目標値。この目標値がどのように作られているかと申しますと、過去の同等規模の展覧会を目安としている。公の機関であるので、民間と異なり、必ずしも黒字の収支としなければならないという考えはなく、もちろん大きく赤字にするもの困るが、黒字になり過ぎず、赤字になり過ぎず、そうした目標値設定となっている。PRついて、私達が考えている人の出入りが多いところは、道の駅や宿泊施設などです。私達が目の届かないような個人商店などは、チラシ・ポスターの配布に御協力いただいているボランティア団体「しらかばの会」が足を運び配架場所を少しずつ開拓し、現在に至っている。人の集まる場所でチラシ・ポスターが置かれていない場所があれば教えていただきたい。

事務局：観覧者数に関わっての補足になるが、今年度のように多くの方に来館いただいた、いわゆるサブカル的な展覧会というのもあるが、子どもや皆さんに本物に触れていただく本格的な絵画展も必要であり、バランスよく開催していくことが大切。観覧者数のみに捕らわれず、なるべく収支は合わせるが、そうしたバランスを取りながら進めている。

委員：まず、令和7年度の展覧会について、多くの来館があったということで、私は釧路美術館と釧路芸術館で、ここの委員と同じような会議に出席しているが、昨年の暑い時期は道東の美術館はサブカルの展覧会一色だった。なかなか、バランスが難しいと思うが、釧路で聞こえてきた声としては、サブカルは来館者が増えるが、いわゆる「美術」というものが好きな方にとっては見る機会が無いとか、年齢的に言うと年配の方になると思うが、そうした方々が危惧する話もしていたので、お知らせさせていただく。団体観覧83件、4,516名のうち、学校関係が35件、3,568名というデータが資料にある。非常に学校の割合が多いと感じた。人数で言うと79%が学校関係の利用。また、3,568名を35件で割り返すと、一件当たり101名が来ていることになる。このことについて、すごく驚いた。先程、鑑賞教室の件数は少ないということだったが、団体観覧はすごい。これは誇って良い実績だと思う。鑑賞教室は、学校に利用してもらうのに釧路でも大変苦しんでいる。学校自体に余裕がないということが、まず1つある。それから釧路では、美術館に直接来ると言うことが難しい。一方でオンラインもやってみないと分からないところもあるので、二の足を踏んでいる状況がある。道東の美術教育の状況になるが、中学校に美術の専科教員が配置されているのは、恐らく半分の学校だと思う。残り半分は免許外の教員が担当しているというのが現状。こうした現状を前提として、美術館の取組を色々な窓口を使って提供していくのがよいと感じた。難しい問題があるが、美術館は地域の教育資源として機能してい

ただきたいと思う。

事務局：団体観覧における学校の割合が高いという話だが、例えば、東京や札幌から修学旅行生が来館している。そうした学校が来館した場合は、一校で170名や200名という多い人数となっているので、学校の人数が多くなった要素の1つとなっている。それから、十勝管内、釧路管内の学校がこま目に来館してくれているという状況がある。

委員：令和8年度に開催が予定されている「チームラボ展」は、数年前に開催した時に、ものすごい多くの方が来館したことが強烈に記憶に残っている。私の周りでも「また開催される」という多くの声が聞こえている。運営計画では約2万6千人の観覧者数を見込まれているが、恐らくこの人数は超えてくるのかと思う。今年1年も様々な面で関わらせていただき、この協議会にも参加しながら、見させていただければと考えている。

委員：今日は「ようこそ！いきものたちの世界へ展」を見させていただき、小林先生の作品がすごく、皆さんに見せなければならぬと思った。会議冒頭に説明があったが、SNSの活用について、意見を上げ対応してくださり感謝する。そこで、SNSへの投稿の可否についてどのようになっているのかということが1つ、また、作品は購入しているものなのかということも教えてほしい。また、今日作品を見ているそばに梅田委員が居て作品の解説をしてくれて、理解が深まった。そこで思ったのは、一枚の紹介文では作品が分からない。時間がないから紹介文を読んでいられない。これはどうしたものかと思った。色々な方が情報を流しているのでAIを上手く利用することで、この作品がどのような作品であるか分かるのではないかと思う。美術館でAIを推奨するのどうかと思うが、AIも間違えた情報を利用することがあるので難しい部分もあるが、活用を一度考えてみてはどうかと思う。

事務局：SNSによる情報発信の有無については、作品の著作権の問題になる。また、作品は購入したものもあるし、いただいたものもある。現在開催している特別展で言えば、道北の美術館の作品を借りてきて、普段見られない作品を見てもらおうという狙いがある。AIについては、美術館職員も日常的な業務において、例えば、会議内容の要約を行うとか、少しずつ手探りで、お試して使い始めているような状況。例えば作品の紹介ですとか文書にする仕事が美術館にあるので、AIが活用できれば、職員の負担軽減にもつながるし、少しずつ、慣れながら、取り入れられる部分は取り入れていきたいと思っている。

委員：本校の生徒を職場体験でお世話になりました。中学校は教育課程の編成上、職場体験学習の実施時期が10月に重なってしまうのかと思いながら資料を見ていた。それから、観覧者数の伸びがすごい。これがサンリオの成果なのかと思った。初任の当時は、美術館では静かに、話しをしないでと生徒を指導していたが、現在は写真を撮ってSNSに投稿してもいいと取り組んでいるなど、時代は大きく変わったと実感している。やはり、本物に触れる機会が近くあるということを発信していきながら、子ども達が本物に触れる機会を多くもてるということを、我々も伝えていかなければならないと思う。美術館の活用ガイドについては、教育課程編成の資料として周知していくとのことでした。例えばだが、当校の美術教員にどのような活用が出来るだろう

かと聞いてみた。やはり、カリキュラムが一杯一杯な状況で、実際に活用は難しい。そこで、授業のはじめの導入に使えるようなショート動画があったりしてもいいのではないかと思った。

委員：本日の会議の感想になるが、令和7年度に多様な展示が開催されていたり、地域や様々な団体と連携していたり、SNSの活用を通じて、観覧者数など様々な数字が上向きになっていることを知ることができて、非常に一生懸命に取り組まれていることが分かった。また、委員からの意見に対しても、1つ1つに御回答いただきありがたいと思っているので、引き続きよろしく願います。自分の体験を踏まえてだが、昨年、東京の上野周辺で美術館巡りをしてきた。数ヶ月前から旅行を計画したが、予約をとらないと美術館に入場ができないかもしれないという状況で、当日も大盛況だった。北見市では美術館自体がなく、たまに美術展などを行う文化センターがあるが、展示を行ってもあまり人がいない。帯広美術館の色々な展示について、経営している塾の保護者の方に紹介をするが、なかなか興味を持っていただけない状況がある。美術に触れる機会がないと、今後、好きになることはないの、なんとか、子ども達が小さな時から美術に触れる機会が少しでもあるといいと思っている。地元からオンラインで展覧会を観覧する体験ができるというのも非常にいい取組だと思うので、本当はオンラインではなく実際に鑑賞できるのが一番いいと思うが、やはり子ども達が美術に触れる機会が少しでも増えるといいと切に思っている。

委員：帯広美術館の、大変整備されたホームページや、動画を拝見し、学芸員さんの果たされている役割の大きさを改めて知ることができた。皆様の言葉の一言で、作品がより輝きを増すことを知り、大変感銘を受けた。今後も多くの方々に、感動を与えていただきたいと願っている。資料をPDFで拝見しているが、紙の資料とは違い文字を拡大することができ、大変見やすい。デバイスによる会議の充実を図ってみていかがだろうか。事業計画にあるチームラボによるデジタルアート展は非常に興味がある。若年層の観覧を増やすためにもこの事業は続けていただきたいと思う。道東の芸術作品をデジタルにより、世界へ発信することにより、世界からの集客を期待する。最近ではVチューバーを活用した美術館の案内をよく見かけるようになった。国内の学生や海外への美術館のアピールには欠かせないものと感じている。音声ガイドは著名な声優のナレーションや全世界の外国語を選択できれば若年層や外国人の集客数の増加に繋がるのではないかと思う。

会長：1つ質問させていただくが、団体観覧において、修学旅行生の人数が多いとのことだが、修学旅行というのは帯広美術館が行程に関わっているのか。旅行会社と何か連携取り組んでいるのか。

事務局：十勝管内で言えば、帯広市が向かいにある児童会館において小学校5年生と中学校2年生になるが宿泊学習の斡旋を行っている。宿泊学習では2日間の学習カリキュラムが組まれており、その中の選択学習の選択肢の1つに美術館での展覧会の観覧があり、そこから児童生徒が流れてくる。札幌等からの修学旅行生については、美術館を活用した修学旅行用のプラン等を特別提示しているわけではなく、旅行会社の方でリサーチして、美術館の訪問を組み入れているということだと考えている。

会長：それから、学校に対して2月10日に美術館の活用ガイドを配布したと説明があったが、副館長が言った通り少し通知時期が遅かったと思う。学校では新しいカリキュラムが出来上がっている頃だと思う。11月での配布でもいいかもしれない。学校はその方が助かるのではないだろうか。また、今日の資料にもあった通り、委員の意見に対し、色々検討いただき、取組を推進していることを実感した。美術館評価についても暫定版だか、既に、ほぼ全ての項目でB評価。最終版ではA評価に上がる項目もあるかもしれない。そうした意味で、美術館の活動が充実した実感があった。今日も各委員から色々な意見があったので、これらも検討いただきながら、令和8年度も美術館の活動の充実が図られるよう期待する。